

本書は、アメリカ人の自己形成史である。ウィスコンシン大学で歴史を講ずる著者にとり、「ニーチェとはわれわれのこと」である。さらに、アメリカ人はニーチェを読む前からニーチェ主義者だ、とも言われれば、その意味を尋ねたくなる読者は多いだろう。

解釈の鍵を握るのは、ラルフ・ワルド・エマソンである。ハーバード大学の哲学部に名を残すエマソンは、ニーチェが崇拜しつつ殺害した知的神々のうちただ一人生き延びて「良き友」と呼ばれ、生涯にわたり彼に影響を与え続けた人物である。ニーチェの代名詞となった「神の死」も、実はエマソンの講演に端を発している。

アメリカとニーチェ、という組み合わせがそもそも奇異に感じられるのは、その交差点にキリスト教があるからだろう。かくも辛辣にキリスト教をこきおろし、民主

「劇薬」手にした国の精神史

ジェニファー・ラトナー＝ローゼンハーゲン著

主義とヒューマニズムをあざ笑った人物が、どうしてアメリカのリアルな文化プロテストアンティズムと親和的であり得ようか。

その疑問にいくつもの逆説を示して答えるのが本書である。いわく、アメリカの進歩的キリスト教は、ニーチェという伝染病を食い止めようと努力するうちに、みずからも病に感染した。あるいは、

退廃したブルジョワ文明を再活性化させる劇薬として、危険を感じつつも彼を利用した、など。

劇薬の効用は、20世紀のアメリカ精神を通して各所に見いだされる。絶対や普遍への罵倒はプラグマティズムや反基礎づけ主義の哲学に、女性蔑視的な発言はフェミニストの本質主義批判に援用される。神学者ティリヒは、有神論の

死を宣言して「存在への勇氣」を語ったし、ブラック・パンサー運動は、「白人の神の死」に解放の契機を自覚した。男性向け『プレイボーイ』誌の創刊や、『TIME』誌の表紙を飾った「神の死の神学」も、ニーチェを介したアメリカの自己形成史の一里塚である。

締めくくりは、もちろん左翼知識人の相対主義を託つアララン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』である。絶対的なものの亡き後、教育とは若き魂に「憧憬の矢」を放つことだ、という結尾の一言は、挑発的で共感できる。大部の思想史だが、訳文は的確で信頼でき、流麗で読みやすい。



原題＝AMERICAN NIETZSCHE
（岸正樹訳、法政大学出版局・5800円）
▼著者は米ウィスコンシン大マディソン校教授。

《評》国際基督教大学教授

森本 あんり